三七全傳

南柯夢

曾4
600
215

600
215

三七全傳南柯夢巻之四

東都　曲亭馬琴編次

真葛が朝風

今市全八郎。布施蝶九郎。ふたの夜さり三勝を郷ゝ奪去や三係河原まで来つるゝ笠松平三と撞見相争ふ。悪視脚平足平ハ。ゝれが為ふ打殺さんと。剣三勝ハ。赤根半七が引攫ゝ。往方もなくどゝ犬の追立ー鶉を。鷹ゝ捉らんとする心持しつ。平三をうち捨ゝ。ゝれを追蒐。捉ゝ塗れ。ゝ。寒めゝしが。絶よあわゝど。真葛が原のほとゝ。夜ハ白ゝ〳〵と明ゝ。甲夜の閉鐘ゝ。ゝ〳〵と明ゝ。疲労ゝ腰ゝ伸ー。立ゝ面を見あつゝ。呆ゝ立在折しもあゝ捕ゝ。の殺士ゝ〳〵と走ゝ。直とゝ闇。矢庭ゝ捕んとゝ駆ゝ。全

蝶九郎は大に驚き。こは何ゆゑぞ狼藉。とゝいせもの。野袴の裾結揚
両刀を斜ふ差る壮佞。徐ろに出ゆを見侠人ぞ。殿の仰ぞと
ゆゝしげに。布施今市はまさに慌眼を定め。その人を見るに別人
ふめり。典膳が児子蛾松曽太郎なり。縁故さく推量られ。猛き光棍
なれど。胸うちさわぎ。ちらの返答及ばぬ呆てぞ立さりける。あとに
曽太郎は。金八蝶九郎を佶とふ。こゝ山ゆり。覬覦の盗臣。吉雅九郎淫酒
をもて進ぜ。鞍の用金を私。剰雅三孫を奪ひ去り。三孫河原を
開。管領家の走卒を猛。既發覚さば。逃るも何地ぞ暫
ばかり。こく縛をかけとゝ。ひたすら罵ぶ。件の両人。今咲ひ。吾倚
曽郎君の淫酒をもて。用金を私ふるるゆ。況こく三孫とゆゝんを
奪ひ去。管領の走卒を猛。ゆんどもゆ孫ゝるもうたみく。ちひ恨て

後悔するぞとのゝしるもめでぞ。曽太郎叮嚀とうち笑ひ。盗人悍〻しくぞ
いひ〻ものゝる。さのゝ松平三とゆゝんが門方ふく。管領家の走卒を殺。
その衣服を剥とりて。三孫を抱り出ゆ。證据分明なり。既陀平こく
耳ゆゝと。ゆゝるとゆ。こゝ小松の蔭ゝる。年の齢四十ばかりなる男。赤
裸ふく走り来つ。ひゝふ金八塚九郎と申ゆんぞれを怒ゆ。ゆと問べ二人は駑馬と
ゆゝ。汝は昨の走卒なる狡。蘇生しなるかゆゝ。逃んとすれ。駑兵ども
立塞れが逃生る道もなし。こゝ忌〻しと咬べ。曽太郎ゝるねく。近曽言雅九の江
彳亦跡。こゝ〻かゝるは南都ゆ。ゆえ。大鳳のゆん憤り。ゆく。密ゆ厚倉二郎
太夫ゆ仰く。旅館の為体を窺。ゆ。世の風ゆ違ゆ。こゝ汝
等が。君を敗たく。私慾ゆ恥るゆ。既ゆ毒顕ゆ。さるふゝく。二郎太夫同
者をゆく。毎日ゆ汝ホが出居ゆ意を見る行くゆ。ゆのゝ既陀平が猛叫

されるとも。同者ゆたくりて殺さ。その母とうみ遺なる扇を見るふ驚て恐る
全八が扇なれば。いと怪さ。聽く仆れて人をはび活るゆ。安ゆく魅生まり。
見く勇りて各氏を問ふ。管領家の赤辛ゆ阪陀辛とゆるものこと。今
年〻三勝が家へ。殿の仰を傳て立へる打〻。如此くの男後ろ立て。
ふ咽喉をいく〻締るとゆ。ぼえが。その後をとりぶとられ疑ふべくもあぬ。全
八が示為ゆりと猜〻。直ゆ阪陀辛を打〻。旅館へ系る途中。れも又
きのふの曛昏ゆ。奈良ゆ来りて。二郎太夫と示一あ。汝ホを搦捕らん
とせ行ふ。そ〻ゆ同者ゆ行あひ。審ゆ一五一十を物〻。阪陀辛を伴ひ。
通宵汝ホが往方を索めぶ〻ふ至まりゆる阪陀辛とゆも蝶
九郎が衣服袴を見〻。あ且らそうが物られとゆ。ゆ見ば阪陀辛を猛り
ちゆ全八。塚九郎が示為ゆる。同ぶ〻分明ゆ。と見ふ〻。ひゆ

られが。汝ホ阪陀辛が衣服を剥〻
三勝を欺〻出せる疑ふべ〻ぶ。ゆ〻三郎三と物〻んが。
ゆぶ〻られを隠むべと。且汝ホが相語る。足辛脚辛とゆりめ。隠ゆる悪根
ゆる〻。昨夜往の風ゆ〻ゆ〻ゆりぬ。さるかふ三郎を夫ゆ。夜の中ゆ吉雅九の
伝〻。奈良へ帰り。られをぶめゆる。汝ホを搦捕るものと。ゆ〻ゆる
陳ぶる中。責問ば。全八ホ〻〻周章。恨ぶ塚九郎が。衣服袴を乞へる。
塚九郎ゆいと。ゆ嘗脱ゆる秋蟬の。鳥ゆ捉〻〻ゆ。見て全八。
塚九郎がゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ吾俳のゆ。ゆ〻ゆ。赤根半七
ゆ。五條の旅宿ゆ門ゆり。吉雅九の無想〻ゆ三郎を本ひ去ゆ。ゆ〻ゆ
ゆ七ゆ縛ゆ。ゆ送恨ゆ。ゆ咳ば。曽ゆ郎冷笑ひ。人の非ゆ本ゆ
ゆが罪を脱ゆ。ゆ探〻。あれ縛ゆ。ゆ〻ゆ〻ゆ〻

曽左郎
陽東ヶ
布袋
今市を
生捕る

今市主八郎

ぬと罵倒ぶも。敢動たらで。まづ縛かれ。衣服袴を剥とり。全八とくもり
犇〻と搦めゐる。二人の悪棍。拂退撥遣ふ。とうの〻悍まるも。ひとり足
をとらふ。やがて人もまり果しゝ。逃る迯ることなれど。所容〻〻と縛らるゝ。
そのとき曽右衛門。沢陀平と衣服を返ふ。とまを被せ。そのゆゑ布施今市
が奸悪憎むべき堪らずとのゝ。このゆ管領家へ訴えゝ。這奴ホンとまれもくも
れ。主君頑眼の誠度とうゝん。さうるとれい顯の人の歎きく通宵ひつるぞく。
這奴ホンの文私へ知るゝ。ゆゑ。眼を家則よりとぞ。其許の一命ゆ差るゝ人。
情を散〻。ゆゑ偏〻ゆふゝて。可嚀ゆ勸解〻ぶ。沢陀平点ゆ〻。それいわ
ゝゝぞる迯。もれ下ゆ。ゆ。管領家の禄とうもゆるゆ。人ゆ強ゆ見。
衣服を剥とりとうゝとうゝぶ。新いゝゝ眼をゆ。二条とうゝふ。相識とる
醫師もあれがられを頼ゝ。さのゆ中途ゆ逃ゆ。暴ゆ病後三郎が家ゆ。

醫師ゆ。が家ゆ立ゆて。保養ゆ。ひの外ゆ一夜明ゆとうゝんかれば
ゝぶゝゝゆも悪ゝ。続井家の誠度ゆもゆじと信ゝちゝ〻密語ば。曽右衛門
大ゆ欲ひゝ。ゆ。何言葉を車〻。その口を鉗るゆ沢陀平ゆゝ〻意を行く〻。
全八塚九郎ゆ對ひ。女ホンれを雑ゝちゝふゝ。ゝの壮佼の面を覩ゆ申ばれ。
ゝぶ。ホン捨ても川揚ゆ。立地ゆ怨を雪ぐゝ。ゆゝゆひちゝゝんと罵りて。
さゝ〻曽右衛門ゆ目礼。嬢ゝ別ゆよりゆとば。曽右衛門ゆ布施今市を川辺
さゝ。大和を行ゝゆゝぶゝ。かゝて沢陀平ゆ彼醫師ゆ家ゆゆゝゝ。縁由
を物ゝゝう其ホンゝう送ゝ見ゝ〻管領の館ゆ帰ゝ。形のゝゝゆひゝゝく〻。
見ゝう先管領の近臣ゆ。その夕ゝ見ゆ及べゝも。沢陀平ゆ疲れを手ゝぶゝを怪ゝ
日暮ゝ。別ゆ三郎が家ゆ迎の人を遣ゝ。且その應を待ゝるゆ。その人ゆゝゝぶ
立ゝゝゝ。三郎が門ゆ賓ゝ。人ゆゝゝもゝえゝぶゝとゆふ。そゆ不審ゝるゝ。

如若く白ひうぐ。明白ゑ主君ゑ笑えぐ。こは三物へひさるすありとて。
ふりぐとまちらく。その夜を丁をせーが結且ひく陀平やあくゑ砂り本つ僕
この小途ゑく猛ゑ病起り。遠ゑ三物が家ゑ到をを引ぎ見とゆふ近臣ぞそさて
彼舞くが死べあたるも外がしとそ。ゆくびゆ問もるろ。てゑ又笠粒
平三ハその夜さり三條行原ゑく。三物が橋みうたゑ来ゑ引まくゆくと怪そ。
これを遮り留る。四人の癖者と挑く闘しが又一人の武士樹蔭より跳出
矢庭ゑ三物を掻攫ひ。忽然と去り去りしが全ハ塀ゑ小をうち捨て。
ひとを追留んとーつ見ぶも霄闇ゑるゑ。風雨烈ーかりけ見が絶ゑ及ぞ雨
歌ぐ浸又舊の行原へ立ゆるゑ脚平吳平が射殺されうとく。彼此人
立集ひ市の正の下主斗らくその屍を検ー。ほとう近くそあも
ぼーゑ見とーゑ至らく平三ハ見驚を見愁くーゑりへらく。一時の怒

ゑ殺ーくれば。自の罪ハ脱ぶ三物を奪ひ去
る癖者ぶもハぐ推量ゑ違ぶ見とぐらんを明白ゑ祈ぶ。ゆ刀製玉ぐく
ものぐぐ金ハ惜ゑ足ねど三物が往方もちぐ。又ゑの寃をも雪ぐ
ちくぐ罪ゑ當らんハと朽を。彼癖者ぶもハ。くぐ家ゑ祐ゑて
三物が身價せんとひつる旅客ゑく。嚮ゑぐ女児。行ぐどのとゆくんの
旅館ゑ召されーくれも假初ゑ面をあくる。その人の部屋ゑ似ら。
うーや三物彼ホが毒みゑ階ゑうるも阿客くくくく。伴まぐえまその
ぐぐゑ貞ーく結髪の夫の為ゑ前操を守るを学の人ゑ物ゑ見ぐ。ちひ
ゆ物くく死りやせん。ちぐし俗を脱ちくく。ちのびくゑ三物がゆくくを索
彼を殺ひ出ーく浸ハ。ものかくもゆくわと深念ー家るゆ。ぐ夜の中ゑ
宇治のくゑ奉ゆく平等院の先ゆとゆふゆく躲見僧ゑ俗の為侍と

件の芋平脚平は隠うを悪根あく。死後は舊悪露顕せり。
彼ホを救ひ〜の〜往方を易る雲るの等閑と風声とを子三
ハられを怪しう。ザハとうちわさるで猛き降を立退ーうが此の野もう。
芋せそで。ひやるるほとやひてけるが昔もかく零落しとる奈良
みく〜膏茅を賣さるよ。彼ホハ芋をとるふ。便宜の地るるだ。今度も
南都へ赴くべとろ。ずく宇治の旅宿を立出。直ち彼地ち到ーが
昔相識ちる人も。おほくハ世を去りう。頼もぐた蔭も迄。そそーが行ハ衣
服を賣るどく〜旅籠ち宛られどこれも竭くいく〜そべうの〜。ぬりくらる
父を哉さ〜ずうる柄杓をうちく観音の霊場を順礼る行者
ホ打扮。毎日ホ南都の街衢を徘徊ー往ホの人の袖ち附ある商人
の店前ち立在く乞食ー。やくるの日の命を繋ぎね。

百度の願事

厚倉二郎太夫友春ハ。密ち赤根平七〜謀ーのり。彼ち三物を奪ひ去ビし
相伴ひつる城松曽太〜トハ。親ち立ちうて。忠義の壮佼られば。これハ謀を
換く。全八蝶九郎を搦捕て。後ち其ものと〜ぬえちた。その家ハず七が五猴の
旅宿ち。直ち祇園の旅館ち来ち。吉雄丸ち。巌君の怒甚しを顔を告
今市布施が好悪。平七が孤忠。ぞく〜僧ずふ演説ー。そく〜轎ち乗ち
ひへ。南都へちん供つるるべとき。吉雄丸ハ。彼のるのをぬそよく
後悔ー。貝芝の怒を畏る。全八蝶九郎が奸佞を憎く。さるユくも平七ち
不忠不義のぬち衣を被せく。ぐ悔ちく〜ふ〜。只明白ふ
勧解まりて。行されど。懲く自殺せんと回答く。名ひ定るるを
ちる。二郎太夫ハ頻ち感激く〜帰ち。さるがハ続井家の郎君

ふくすーまたとく。ちゝのあとゞ。君の一國一城の主ぞよ。ぐゝ
小弁郎よ。かゝつひゝ。身を塵芥のごくすまふべた。今ごろのくやゞ。さすが。彼
洋〻を奪去るゝあくんぞぶんの。ゑゝ慎を明白ゆさまゝ。彼が
忠義いくづゝ。彼を不忠の罪人とゝ。ゆふも。大厨のゝ憤解て後
ハ居ゝくゝのゝんゝ。君のゝうゝふゝ。ちゝとバ仕ゝすもたゞゝが行ゝ。二郎太夫
ぎゝうゝとゝゝゝゝ。ちゝゝ帰館あるべゝ。理を尽ゝて練ゝらゝ。俄頃ゝ南
都ゝ秀川ゝちゝゝ。主君頓明ゝゝゝゝ。僕頃日。間者をゝく。吉雄君
のゝん言ゝ近臣が出居を窺ゝゝ。雅君のゝん慎ハ寄ゝくゝもゝ。ゝゝゝ
近臣ホがゝゝ僻ゝゝゝ。その衣ハ箇様〻〻〻〻。全八。塚九郎が為体
審ゝゝを告。又ゝゝゝ。赤根半七出ゝゝ。吉雄九の傳をゝゝゝ
ゝゝゝ。病ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝ

その罪を宥ぐ。就中赤根羊七は物の用をなすべきひと。卷さる白後く
ものを立物ら。日来重く用ひらるゝ。恩を稟く恩沢ちゝざる
彼が往方へ。草を苅拂ひても惡よ。汝典膳とあるもの。全八塚九
弟を鞠問せば。羊七がゆゝしもなどろもとざんとく。小膝を敲く作
まれば。二郎太夫達ぐ。れをうけあるり。又ゝ吉雅君な
對面ずしくく。老臣ホが心を白安うじめ。とうせうが。順昭さらば
誘引ずとのゝ。その二弟太夫は。吉雅九の子舎人ゆさて。一五一十
を告。償ゝ舊の亦ゝ。順昭ちゝ吉雅を行じ。此度のふつて
近臣ホが非法の挙止は。主の悞れど。四方ゝ弱官るれば。ふゝも
咎ど。以後を慎へと教訓を。吉雅は始終改を低柔ら。ゝ
退出ゝ。さる程に蝦松典膳は。君命を稟く。二弟太夫ゝ全八

蝦九弟を責問ふ。彼ホは身の罪を怪ん。爲に羊七をあさらむ。
吾倅愚よりゝ。ゆ七は彼三條を殺ゝ。三條は原ら
後のるゝ。行光へゆゝ。此度の対面。
ゝとゝ出るゝ。部彼のは脱ま。吾倅のゝ。羊七ゝ
是非ゝ及ど。ゝ回答ゝ。厳ゝ責問ゝ。その母のるゝ
ゝ曲膳は。ゝ羊七を憎ゝ。這奴柴賣の孩児ゝ。
蒙ゝ。近臣の上ゝ列ゝ。剥千ゝ時
ゝ。その方ゝ受ゝ。ゝるを彼犬自ゝ。近曾五沢ゝ。
ゝ敬ゝ。ゝが才学ゝ。ゝは怨ゝ。
を相撲ひ。舞ゝ玄通ゝ。面目を失ゝ。言語同断ゝ
癖者ゝ。ゆ七ゝ。ゝ論ゝ。その罪は又ゝ

一院追放
ちんと
平六直盤
さそらる
さの弘
丸弘

赤村平六

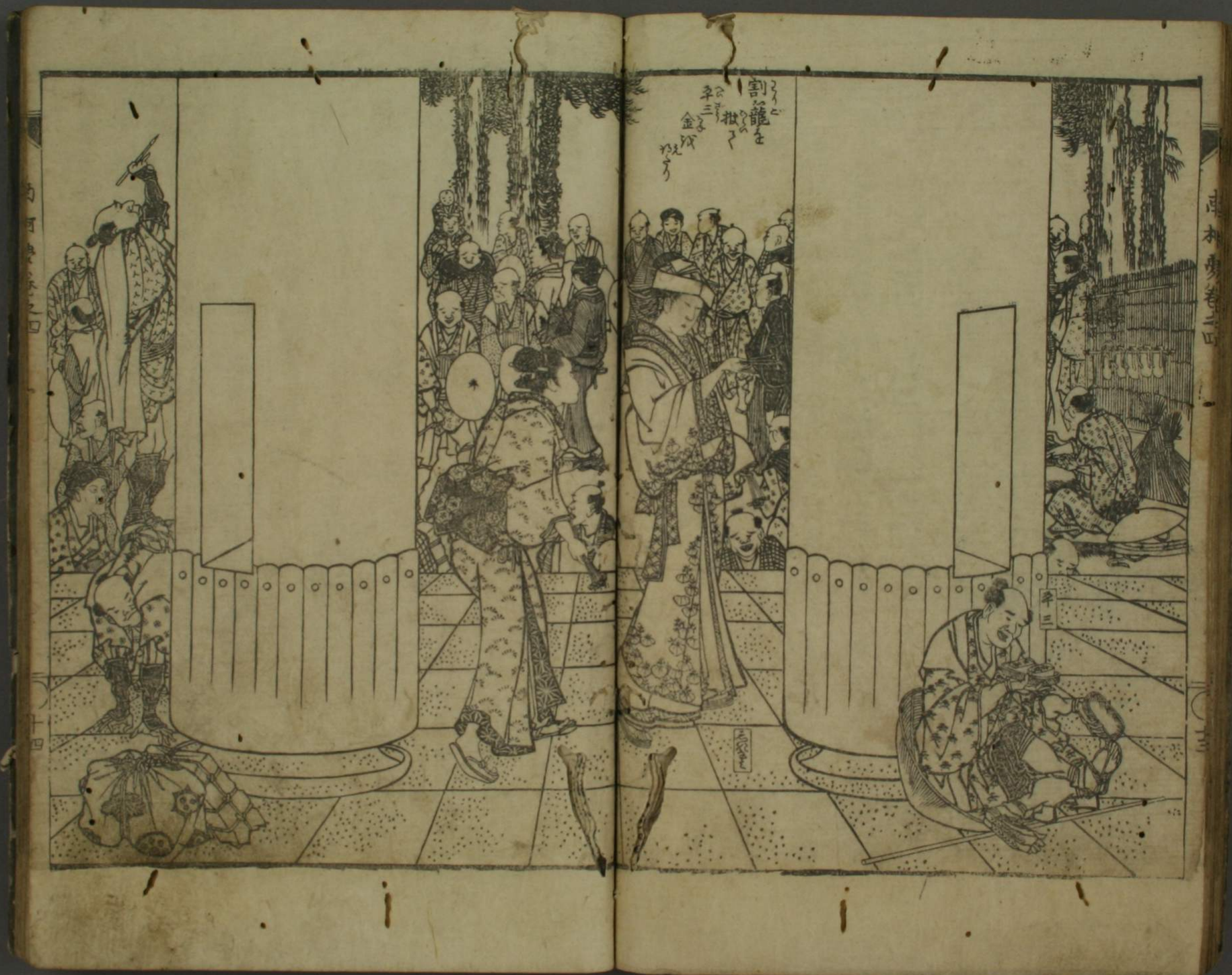
ぐる。されば羊六は雛腹を切ノせぞろ。うらの憤のやるさまを。とりたてをる。祝
子を罵ると。面あくまで唇をかむ。園花は又の怒の烈しさ。
ゆゑくまつけく。妬くとそんききは。彼方へ行くべき。
の蔭。草舎の簷下に立ちて。ひとりぬれ。又や病ある
花はせさる秋。くくと病くせるも。ちりぬるけとび音絶と等閑
ぬるを。ろをるとと恨みひけめ。男子と生まれるひまへ。婢妾もある
りの外。況く旅寐の役。ひとり女子と假初の契りを結びの人も。
今ぞ。ぬるぬるに罪あれど。ちるを腹のたちまちふ。縁故もちうさまのね。その
義くさえ。教えんと。理ともおぼえ。それらてるが身の妬みく。男を
教ぬ。うるんぐいはまへ。生る日の物ぞ。死て後の迷ひ。物ものも折
のあくまで。彼人の在さねば。あさまふのさいふるぐん。ぬるとく河
ぞ。もぐんぬるるぬ。ぬるぬ。自害くくせ。人を頼ひ。
ぬるく。待ひもぬる。夫の。心の底は解ぐる。顔えくぐさび慰る。
もあふんるれは又あはの森とぬるとぬ。げんやらの身のをるる。又を
諫め。母よくぬる。声を惜ぐ位。沈めば。敷浪も羊七を。けあくいぬ。女児
が貞操のくものつもなくねふ羞く。ゆくゆくまひくし。夫を諫め寛るあぐ。貞
膳もかく園花は位ぬとなるく。勇をたてるもるるつ。終は羊六が死刑を
放べく。彼色の罪状を定め。二帝を夫くくふ。主君を笑えあげくぬ。全
八螺九帝を追放ば六はその子の罪ぬるく。生仕をぐめるる。
かくまくぐば六ぬぐ子の為体を笑くくる。貝驚を貝怒り。貝薄氷
を踏ぬちくく。憂苦の中は日をぬせる。終は生仕を止れ。直塾のさ
ぐぬる。典膳二帝夫れを傳。僅は命を惜ぐぬる。月俸を

あらりれば。いとゞ〳〵迷恨よ堪ぞ。されば其ぞ迷七が。日本博士ぶりて。親の諫を用ひざる。この禍を惹出せり。這奴憎し。こゝやくざもさてゞふ恩愛の悲しさ。その往方も分らざる。あるとれい怒り罵り。又あるたいらち歎き。天日明るうとのべぶも。つゞ家のいとゝ暗く。絶て訪人あざれば。憂を慰むることぶも。げふ栄枯得喪は。四時の代謝ぶでくのえる梢の花。後るゝも先ざるも。いづれ秋よあはざるべし。彭祖が命長かりしも。子孫あれば悔ぐる。石崇が富貴なりしも。生涯をうとよ。穏なしく貴かんと願へば危く。富く驕りめを亡らや。禍福吉凶を。亀の卜部よ問んとう。尾を伏中よ曳あれとぞ。ま六ちらのうたよ。米谷の楠を伐るるを後悔し。篇篠が連を。ひ生れて。朽をしくとと。今はその心ひるりけり。さる程よ園花はまくまば

るる所をひもとりて。病えどわふ孫増つ。炉くびうち臥くて。枕首を撫ぞ。えゑ想思病のるるれば。醫師も眉根をとを速みて不愈ぞ。ぐ〳〵んとのふよ典膳は安をりもるく。敷浪は毎日よ奈良の大仏よ糸詣し。百度参りとのふる所〳〵。女児が病ぶ。頓よ本復めゼ。禱の外更ふ他るるるりけり。笑いさくあを。笑松平三は奈良の巷を徘徊して。歌祭文を唱ひ食〳〵日をとふ。頃しも九月の廿五日よるりぬ。けふは高天神の會日なれば〳〵。彼社頃よ立在糸治の老弱よ袖乞を。偽ふ。須うその代糸こゝろ〳〵て。役者五七人を引る武士。門前の茶店よ憩ひ。馬をば店前よ繋ぐ。その詠はも〳〵。うるる所よ入るる。主役割籠を提くあぞ。スナ三とれを。ぐ〳〵。ぶるるのはうふりゆを。役者よ對ひく。飢るる順礼の乞者よりの

こゑとゝのふ。その声や彌生えん。主あり。名は武士。若黨を伴ふ。おのゝ
ゝとゝのひ。ゝとれば。件の若黨ゝ風ゝ。卒三を呼び入れ。
飽まぐれ飯を食し。さくらのふゆ。汝今飽られば。翌ゝ
有たし。ゝゝ母ゝ主の食残し。ゝるあり。割籠とゆゝ。
夕餐ふせよゝ宜ゝるゝゝ。ゆゝ索ゝ真中をゝと持ゝ。これ提て
ゆけゝとのふ。卒三ハ数回押戴き。割籠を門提つ。又社頭ゝ至りて残を乞
や申の下刻ゝ及び。ゝつの寮ゝを張れゝ。大佛堂へ赴ゝ。又物ほ
ゝく多ゝ。高天神ゝ行ゝる。割籠をゝゝくふゝもうけど。飯の
中ゝ一色の金ゝり。三拐が才價と書つけゝ。ゝハゝゝ驚ゝ怪ゝく
づゝと易思ゝく。縁故を推量ゝ。三拐を奪ひゝゝたるハゝの領主ゝど
の。世のゆゝを悼ゝ。ゝゝ奪ひゝゝ後ゝ。ゝくゝゝハゝなゝ。

又三拐が舊の養父ゝ。五條の村主ゝ。結髪の夫も。彼ゝ
それゝ所為ゝ。二ゝお一ゝハ違べゝ。遠莫ゝ。彼も素ゝ
を。ゝ探ゝ計策ゝ。今更ゝ金をゝ。ゝゝを蕩ゝとゝ。
腰ゝ。高天神の茶店ゝ向ゝ。彼武士の名氏も名ゝ。
俄ゝその茶店ゝ走ゝ行ゝ。割籠を披ゝ。如此ゝの殿ハ領主の
内ゝ。何ゝ名告ゝ。常ゝ憩ゝ。
ゝとゝ主人答ゝ。彼人ハゝ。憩ひ
ゝゝて。次の日五條ゝ到ゝ。赤根ゝ六ゝ
六ゝハ近曾閉籠ゝ。ゝゝゝゝ縁故ハ子息ゝ七ゝ壮伎郎君
のゝん供ゝ。京ゝ到ゝ。三拐ゝ。密通ゝ。逐電ゝ。
ゝゝゝ卒三ゝを。ゝ。ゝ。曖ゝ。ゝ三拐


割籠を拙く
辛三
金伐

を奪ひ去る壯佼とて。結髮の夫。赤根半七郎。ありしを彼の文
の志を惜むかしふ主の供〻く俗よあれば。その便宜を窺ふ。密夜告
ひし。夫婦ありつゝもふ奔るんかゝらばるゝ〻一言人。これも如此と。
ゝもそゞ〻方人せ。徒と挑ゝ。聞ひ。人を救その罪を免ゝ。寛よ
親のゝろ子ゝゞとゝ。妾の常言ゞ。
かゝゝぐふのゞゝゞ。今ハゝひたゝゝ。この牙慣も何ゝゝ。ゝ恨ゝ。
又ゝふゆ。さゝゝふゝも不審ハゝの金く。彼ホる為体ふく。奏ゝゝ。この
永價を贈らんや。これゝふゝ故ゝそふめゝて。ゞふかゝゝの地ゞばけゝる
けゞゞ。彼割籠を手ゝる人よ。やゞゝあハゝゝゝゝ。領主の藩中を徘
徊ゝるよ。食ゝれば。内へ入らゞゞ。ゝゝく餓よ臨やゞも。件の金ゝゞ
一枚もしゝるハゞ。元翌ゝもゝゝぬ罪人の兄ゝれば。勉よ人ゝゝ

彼らんゝもゝゝゞ。この母奈良の街衢を徘徊ゝく。ゝのゞく在所
を索ゝりしの外よ月日をゝゝ。四年ゝゝ経ゝゝ。

夜半の月魄

さゝも赤根半七。その夕三拐を追蒐。三條河原ゝく。金八。蝶九郎等が。
平三と挑ゝ戦ふゝゝよ追著。矢庭よ蝶九郎を突仆ゝく。三拐を小脇よ
肚抱ゝ。闇よ紛れゝゝゝ。河原伝ひゝゝ北を斥ゝく。吉田の森をゝゝゞ。
白河山の麓よ至る比及ふ。雨も歇ゝ更闌ゝ。月ハ出ゞゞ。天ハゝゝ結陰ゝ
路くゝく。往来も既よ迹絶ゝゞ。ゝゝ三拐を扛ゝゝ。ゝゝゝ縁由
を告ゞゞく。理ゝゝもゝく来つゞゝ。ゝ懼ゝゝもゝひけゝ。ゝゝゝゝ
を殺ゝ止せゝのゞも。ゝゞ朋輩ゝゝあれど。彼ホと謀ゝあハゝく。ゝゝ計
策ゝるゝあゞ。彼ハ彼ゞゝゝゝ。私慾の為よ。これハゝゞゝゝゝゝ

の為めと。審かにうんいなびくしおづその際界をゆえもくべーいめる頃。
そのさを祇園の旅館に居きーめひる郎君ハげふりちこが主君ふーゆん
ぞうれ人に在もろうり。僧ゝ俗に遊びゆふゝ。近臣に至るまで。明白ふいを
ゆるぞ。偽酒に耽りゆふりハ。佞人ぞーがとーめふれど。世に使えゆべげて郎君
の就度とうりてゆうゝ。禍の出来うんも量ぞ。ふるふゝ。大殿ふゝ憤
ふゆー。速に居くゝゝ。愛子をゆづゝ失えんといたまたゆく。家隷ホこゝ
て。ふ汗を握りゝ。周章大うゝ。ゆ。ゆもさゝがれが佞人ぞゝ。ふのこゝめ
て。郎君を偽酒に誘ひ。ゆ母ゆうを伎倆ゆるゆ。そうさ氏欺きて。奪去ゝん
とせり。ふうとらくゝ。つが身久ゝ病みうゝ。旅宿を異ふ。且出居も自在
ゆゝされべこれを練ゆることを好ざりしふ。中病ゆもおとゝ果うんとと。ゆ
ふもあはゝふ同志の忠臣僧ゆふ。つが旅宿に詣ふゝ。公中の機密を聞

そうさ氏奪去とていふ。これ化ゆ。これとそうさと密通。その非を覆ふ郎
君ふ假托。ふ贖のふを計較。そのふ發覚ゝ。森りたゝと風声せば。郎君の
ふ悪名を雪べく。主家に禍うゝるべーと相治ぞとう親を捨ふ妻子
を顧ぞこうゝ。不義の儒衣を。被る雨夜の暗紛ぞ両旅を投る范蠡が。
志ゝいさせゝ。それとハ遠に質ゆり。縁も好もゆる人を。虐ゝ忠に義と。
ものゝゝゝゝをうさてゝも。死ゝるゝ忠ゝんが。ゝゝゝゝ。ゝゝ。
隷老黨ハさゝうゝ。その妻子に至るまぐ。悉ゝ離散せべ。ゝゝ。その人の歎
ゝゝん。ふを叙ゝゝ。駅の人を。助くるゝんべどゝひ。締め。ゝゝ。ゝゝ。鬼ゝ
ゝゝゝも。忠義ふ換る慈悲ハゝ。ゝゝゝゝ

同志の忠臣ふ笑えまたられ。後のすハ云易うれ。縁故ハかくの如し。不便
うう盛の花を。散らと忠義の太刀風を。弥陀の利剣と観念し仏果と
ゐらとひもあど。閃うこ引枝く又の電。薄ぐれふ三徒ハ。吐嗟とぐう
花退を。笑うとうとは七ぐ又突かく剣をうん僧。裳蹴ゆ夜あ山。
山川の音凄じ。あとやくと鳴ぶ声も。妻恋鹿の友音のこ。應く助る
人もなし。三徒ハ雑たう。舞ふふ馴くふ刃も軽く。ゆ七ハ又ぐめうう。ちろ
ゐさくく叙さんと。そくハ左右うく打もうけど。追ちく逃ぶ。是や叫喚大
叫喚。氷の地獄焦熱の王うと行ふ刃も冷て。脱をかさうの下ふろ。三徒
合ハかうとえく。ゆふ行ゆく只管ふ刃を脱んとふもあど。忠義ろ為と
寛いとる。事をうたとる壮士の。逸とく脱くんや。命くく迎とも。
いざとう何の山ふ落う。紅葉くも山散果る。刃の秋をとりふせん。

悪の悪業うりせば。人を恨るうれど。故ありてこの年迄生死りへ
母を慕ひ。俗世の義理ふ絆されう。そふのくふ〜えもあハね人ふ一言迷ひ
うくん後ふその人ふ。ゆくくぐとふ声も。涙ふいくく屬る夜の。顔ハ定うふ
えねど。そひうる風情うう。ゆ七も瞼ふ。ぐくた。鳥の死んとるとた。
その啼て悲く。人の死んとるとたふ。そのいふるのうとくう。そふ行ハ何ふ
れ。ゆ七やハ笑えぬ。ばく〜三徒ハいろんとるふ胸ふさぐ。そふ
涙を押拭ひ。恥ふたるふハ見どぐ又笑。拙子三ハ。実骨肉の親ふ
ど。過世ふくて三才のこた。垂乳母ふハ生別ふ。又ハ七方の秋ふ
ふれく非命ふ学を去。仇ある人ふ恩を稟。養ふくハ恨を捐。
者ふハ尽さどとも。不孝をせと子を省。生居の障子あけくれ。
隔ど仕し養母ふ。世を早ふ後ハいろる。ふ養又ふ疎ふ九方ふ

冬人ちまど。救されんとそうしが。かくて人を又ことのみて養育まで。孝丈伸てん反哺の孝ふ。舞くくんうう彷ぶ。
雅をとさふ結髪ー。夫ふ一トくび環會母の生死もそくくを母ー。耻を捨
てる世渡も。朗詠催馬楽早歌ま人の乞ハ慰まどこが嬢さ慰るくとぐ
も絶くく位顔を。うゆと楽屋の十す鏡。くもらね操を狩衣の家だうう
もつぶ夫ふ。そくせをはーとハ必ども。烏帽子のかけ緒をくちくくく。音軟
とれがその又親よ。捨くれる恨もる似くう。そくば夫もらだうう。ふ
くくくがとくん。逢どふあくれ死ねばくく。門の菊の隠遁を学ぶまび。
夫ふ羞ハ見せどとくく。こと彼而ふあうう。遠離居る成ふハ。かく今
宵見もそくぬ。人ふ忠義をさてさくて。今の親ふハ孝うくど。色情ゆ反節も
こうりとうを人ふ温くハ。ぐうう恋ーくれと。ゆの悪業ハ恥くも

及ばど。護身嚢ハ夫の紀念内うう撥ハ母ふあ人。割符ふ世くくくくくく又
の。遺せも結くうう。俠の両ハ絶ど降る。笠屋三郎が身の果を。うくくん後
ふ待くくくく。その夫の名ハ。そくうふ。嘆うあげつ掩ハ袖ふ。言の終ハ口隠う
ぬ。ま七ハ夕毎ふ。そひあくるうのくうれば。眼上ふふうあげた。又も耳も
側くく。数回嘆賞ー。弟子ふ称うる孝ふ苦節。ふくくふ羞るくと
ありく。りくくるの乳母をあくんくハいハざるや。と向ハ三勝驚を怪くくを
いくくくくうあくる。りくくの人ふと。ふハども。くくくくく

白川越より
羊七
三郎を
設まえ
ん七

あるともふ。呆れ[illegible]ふぞ理なる。そのとき[illegible]七八。又をあさめ〳〵。三[illegible]を勅り。
拔け。小草刈布。あるともふついぬ〳〵。さそのみゆ。これ近曽吉雅九郎
ちん供〳〵。俗よあるとしくども。病名ふぞうとわ〳〵れる且バ。絶〳〵下[illegible]
そのさふ逢ぞ。えず主従。その名をふく〳〵匿れバ。続井家の郎君あり
とふ。やひうけどやあり〳〵。鶯ふも両夜[illegible]打れ[illegible]
ゆ〳〵これも又。吾妹子ありとふ〳〵ざ[illegible]た。雑さとふ別且〳〵ば面がり
ハ忘れ且ども。霄[illegible]ぞハ〳〵とぞふハ[illegible]じ。り〳〵やりて刺も叙〳〵なバ。
さそふ悔〳〵あ〳〵んぞ〳〵ん。嗚呼危ふる危ふ[illegible]。さるふ〳〵もそふ〳〵ハ
豊田の山本ふく。荒熊ふ狩ち〳〵れし〳〵。絶〳〵生死もち且ぞ。大さ
ハ必ふ〳〵た人と歎きそひ[illegible]ふ。今の物拾ふ〳〵ゆ〳〵ふ曉[illegible]
[illegible]ぞ[illegible]。ふた[illegible]ぞ失[illegible]ふ[illegible]

恨ふ[illegible]ふ母ふ[illegible]又の非をあ〳〵さ[illegible]。家ふも[illegible]。その孝ふ貞
感激ふ堪ぞ。これハ却ひうひふ〳〵も。又の命惜ま[illegible]。近曽蛾松典膳
の女児園花を要ふれども。前の誓ハ破〳〵ぞ。終ふ下ふびる。彼と会を
共ふせぞ。ふの年ふ[illegible]ふ。そのさハ死せりや世ふありや。ふしあ〳〵
神仏ふ。祈願せ験あり。今日今宵危窮ふ迫り〳〵。ふ〳〵環會ふ。
これも夫婦の悪縁ふ〳〵ん。さく形ふやゆ。と妻をふ[illegible]。園花ふ[illegible]
さ〳〵ふ。吉雅九病ふ乳保養の為。俗ふ拝びふ[illegible]。今市金八郎。布花蟷
九郎ふ好悪。厚倉ふ誠忠。曽太郎ふ質朴。ふ〳〵ふ東奈良の為仆十五
一十を説ふ〳〵。又ふ〳〵ゆ。又のふ〳〵あ〳〵を[illegible]ふ。ふと畏〳〵も悲〳〵。
昔丹波都ふの誓ひ[illegible]ふ。菜利の為ふ忘却し。蛾松氏と
縁〳〵結ん下ふ[illegible]。そのさ[illegible]失ん[illegible]ふ面目ふ。

それとちよびも。又やそろさを殺さんと。せこへ。兼忍の挙止よ似くれども。
一夜ありとも伴ひ。身を慎く。そびし定め。誠心へ。雖ども。
なふ。りからどへ名告あふ。ちとがも絶さ。めぐらび。空ふ不思議の対面
くとく。首尾を物ぐれば。三拝涙を堰うねて。変くへとれつぶ為よ。化
妻をばかさねど。色みも愛ど情みも。ハ主ね人の忠義ゆ名ふ。ちとる
色情の名ふ負へ。ふもも拝ま。志を。ぞくへ行ら恨く行くんとれ
て後へいひちと。言の埃ふるの神へ在ねど。指の紋を舞の名よ。ぬるくちぐふ
そひつぶ。君へちざく大和ふ。ちとうつ妹と夫の山のうひる。隔られ
ふかる教ふ。さくも雲のたぐちひ。そるくの空のく。瞻て。月も日もつぶる
よ。照ひぬへねうとかとち付しが。ゆ名告あふ。年来の志へいくたかへ
命も旨。今の養又へ千三と。卑ひ世とうへとれ。

へ立伏りて。財宝の為ふ惑され信義を失ふ人ふ。恩愛のものを捨ふ。
行へ孝行もえつさど。又母の生死も問定やどて墓ふ。ふう行ふ。いと悲く
へ申とど。縁故もちりぬへね。園花どのと申ん。姉さんへ罪ふ。ふり。ゆの
忠義ふるなくへ。殺くくふ。ちとうを。ぬ。芝生よ。ゆ汝ん。
妙ふる頂を伸。一花咲る姫百合の散さを。逆くとへ行よ。半七ちとく
嗟嘆くて。これそのそびめ。殺さんとびて定へ。身を慎くせんとてうれよ。
既よ吾妹子ありとちとて。これを殺さば我よ違へて。さんびとく夫婦ひろ
ともふ存命て。ゆ忠義よ。假托て。逃も駆ともちうんどゆへ。
護厚倉やへ面ぶせ。ぬへくくそろさを殺くへ。丹波都どのく誓ひ。
母の言語もいさづくりて。そろさへちふかく存命て。行行ふ。三どのふ
あひ。孝行を尽くへく我をきんば不孝ふ。只死べたへつぶ身ぞ。といひつ

刀を拔かんとせば。三彷慌てゝ携へて面を伏せ。忠孝の才を
報ゆるに。三彷もかつゝ涙ふ。我はこれいかぐ生殘り。物思くとろ。情ある
言の葉ふ。彼ゝ情なしゝや人に何ともなく。親と親とぶ誓つ。許せ〳〵
の妻ゝどやのつゝもふ学を主てゝ。景護〳〵とあぶ〳〵ゝこて死べれ。
いと理なと恨ぐち。携へ携る刀の靭ふ。落る涙に玉〳〵數の玉も數ちと數
人の數さもかゝや哀とゝ。ま七八三彷ふ棟ら見。行〳〵ぐと出ひ〳〵
刀をゝさめ。げふれゝ〳〵悔てゝ。そゝさも寂さ。これも死ま。潛ふらの
地を立退ゝ。一日〳〵も妻と〳〵び。夫と〳〵ふ年末の。節操ふ報
ゆ。亡母の庭の洲も忠も義もゝ。ゝ袋ぞ絆ゝる。今もゝふとゝ死分る。
胸の鏡もあひ見て。樂昌公主の故事も。慢ふ出ひ生〳〵れつ。誘ふ〳〵とて
刃を拔。ゝ刃ゝ刃もゝゝ。三彷ゝ頂ゝゝ外を掛紋も。ゝ寂ゝ〳〵び

ひとぶの神。迭河代の形見さふ。主裏も悪因縁。ゝそれとても帝君の
ゝん悪名ぶふ雪ゝ。夫婦がゝ人の數ゝ〳〵。ゝらゝ又ゝゝれゆゝふ。罪深ゝゝん
ゝとゝひ男。大和よゝゝね山の挾を。ゝゝゝ瞻ゝ月魄も。ゝ傾ゝ〳〵木の
間偏る。遠寺の鐘も音ゝ且ゝ〳〵。草葉ふ集ゝ〳〵虫の声。ゝ〳〵ゝ長且を
十ゝ穂の薄。ゝゝゝ夫婦ゝ後ふゝ。先ふゝゝゝゆ〳〵行ふ白河山を
ゝゝ踰ゝ〳〵。湖水を人ゝゝ陳や。ゝゝゝゝゝ陰ゝゝ。天ゝゝゝ〳〵明ゝ。
〳〵てゝ七三彷ゝ。ゝゝゝ由縁ゝゝゝ。近江國麦賀莊ゝ。佐〳〵木の一
族在城〳〵。ゝゝ遠ゝゝ。ゝゝゝ便宜の地ゝゝ。ゝゝ〳〵ゝゝゝ
ゝ且ゝ。鑢ゝ彼ゝふ卦ゝ〳〵。ゝ居ゝゝゝふ此ゝゝ三味線ゝゝゝ樂富
ゝゝ彷且ゝ。ゝれを嗜ひゝ麦ゝ。ゝれゝん三彷ゝ又。丹波都ゝ彈初ゝ
ゝのゝれゝゝゝゝ昔を忍ゝて。三彷ゝ俗ゝ日。ゝ〳〵俄ひゝゝ

ぞうろう
一勝
半七と
さつ
きつ賀の
ぜうよ
ふ朝ぐ名
任居も
ぞうろう
ぞうろう
ぞうろう

うべ彼此の女の童ふ。彼三味線を教ゆ。ま七ハ男の童ふ。ひ遊の指南を
ちゃ。艱難の中ゆ月日をふるをふ。その年の十月ゆ。三彌有ゆ女
子生ゆ。親のよびづゝ守養育子ハ恩受もゆ。とゝ母ふうけ見ば。夫
婦ハ只夢中の玉と慈ゆ。その名を阿通と呼びつ。面影ハ又母ふ肖
ゆ。いと美麗ゆ。ゆる行ふ光陰矢のごゝ。又稜のごゝ。お通ハ十五方ゆ
ゆりふゆる。母三彌ゆ毎日ゆ彼此の女の童ゆ教ゆを学ゆ。ゆ
ね舌ゆ。柳節唄ふも可愛ゆ。かゝりゆれど。家ハ究ゆ貧ゆ。ハ
ゆとゆ子を養ふ。物笑ゆ。夫婦ゆ。淺合ゆ。
この示ゆをゆのぶふハ究竟の地ゆれど。山ふところゆれバ。絶ゆ大和の
音つゝを学ゆ。俗の景迹をゆ。俗ゆも芳
ゆね。ゆ日の地ふゆ。洪國の名の集合ゆ

のゆも又三彌ゆ養又平三ゆ学ゆ。ゆ。家
財を傾却ゆ。路費ゆ。親子三人。麦賀の荘を首途ゆ。中先道
下ゆ。時ハ九月のゆ。住ゆね旅寝も寒ゆ。水薦苅
信濃ゆ。沓掛の驛ゆ宿ゆ。夜ゆ七俄頃ゆ發熱ゆ。ゆ死ゆ
ゆ。終ゆ風湿ゆ。腰ゆ。藻草。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。

の廣き宿りも舊の狹ち家が住ひ。翌の夏賀へ帰り更とく注
ぎ。彼を又我をそふもまた七八〜肥ちかねく。輙魚の涯を吻くを
異のとびまれば三拐が乏けそさいろうぶん。寛な苦中の苦。の秋の
ぶらが永むとの。扶うとく〜ひらつうぐ。

三七八二傳南柯夢巻之四終

東條主水 東都駒込 五番三号 土平郎町 見附ヶ谷